

## 1. 教育の責任

国際日本学部の教育目標である「日本および世界の多様な歴史、言語、文化、文学、国際関係に対し、尊重、理解、受容を試みることで幅広い視野と教養を持つとともに、専攻領域における専門的能力」の育成のため、西洋史を学ぶことを通じて、最終的には、主に以下の能力を修得してもらうことを目指している。

1. 過去の歴史をできる限り同時代の価値観に即して理解することができ、それにより現代の価値観を相対化できる（時間を越えて過去の人々の考え方や感性に寄り添おうとする姿勢）、2. 遠い外国の歴史であっても、自らと無縁のことは思わず、それを日本の歴史と比較して関連づける視点を持ち、それにより自国の文化・価値観を相対化できる（空間を越えて異なる文化を理解し、それを尊重する姿勢）、3. 西洋の歴史を一国単位あるいはヨーロッパ世界の中で完結したものとして理解するのではなく、国際的にあるいはヨーロッパ外の世界との関わりにおいてとらえ、かつ、それにより西洋中心的な視点を相対化できる（グローバルな視点から世界史を見る姿勢）、4. 王侯・貴族・聖職者・市民（女性・男性）など様々な歴史主体の利害・立場やそれらが織りなす関係性に着目して西洋史を見ることができ（複眼的に歴史を見る姿勢）、5. 現代における様々な事物・出来事や現代人の意識・価値観が、多かれ少なかれ歴史の産物であり、過去の歴史とつながっていることを理解できる（物事を歴史的に見る姿勢）

2024年度の担当授業科目は下記の通りである。

「キャリアデザインⅢ」（演習、コアカリキュラム科目、春学期、2単位、18名）

「キャリアデザインⅣ」（演習、コアカリキュラム科目、秋学期、2単位、17名）

「西洋史の扉」（講義、東洋史・西洋史メジャー選択必修科目、春学期、2単位、104名）

「西洋史講義」（講義、東洋史・西洋史メジャー選択科目、春学期、2単位、51名）

「西洋史総合講義」（演習、東洋史・西洋史メジャー選択必修科目、春学期、2単位、18名）

「西洋史研究 B」（演習、東洋史・西洋史メジャー選択科目、秋学期、2単位、25名）

「西洋史基礎演習 B」（演習、東洋史・西洋史メジャー選択科目、秋学期、2単位、47名）

「西洋史研究の歩み」（講義、東洋史・西洋史メジャー選択科目、秋学期、2単位、79名）

「ゼミナールⅠ」（演習、コアカリキュラム科目、春学期、2単位、13名）

「ゼミナールⅡ」（演習、コアカリキュラム科目、秋学期、2単位、15名）

「卒業研究」（演習、コアカリキュラム科目、通年、4単位、14名）

## 2. 教育の理念

「グローバル化」という言葉が聞かれるようになって久しいが、今日、世界の出来事が自国の政治・経済や日常生活などに重大な影響を及ぼしうることは明白である。また、日本に居住する外国人の数も年々増加している。このような状況において、国境を越えた国・地域間の協力・連帯や、異なる文化的背景をもつ人間同士の共生は重要な課題であり、本学の建学の目的である「優れた国際感覚及び問題解決能力を備えた人材」が求められていると言える。私の専門とする歴史学は、国際的な諸問題や多文化共生に直接の解決策を与えるものではないが、上記1で述べた5つの能力を修得することは、国際感覚や問題解決能力の育成につながると思う。西洋史を学ぶことを通じて、最終的にはこれらの能力を修得してほしいが、まずは、外国の出来事や文化に関心をもち、「内向き志向」を乗り越える精神を養ってもらいたいと考えている。

また、日本人の平均寿命は男女ともに80歳を超え、人生100年時代の到来が予見されているが、他方で、人生や生活の質が問われるようになっている。本学の建学の精神である「生涯にわたる、人生のための学び」は、ただ生きるのではなく、よく生きるうえで今後、重要性を増していくと思われる。建学の目的である「豊かな教養」や「旺盛な自己開発精神」の育成は、この人生のための学びの基礎となるであろう。上記1で述べた能力の修得は、こうした教養や自己開発精神の育成にも資すると思われるが、さしあたり、西洋史を学ぶことを通じて、批判的な情報の摂取能力や価値判断能力を身に付けてもらいたいと考えている。なぜなら、とりわけインターネットを通じて情報があふれている現代社会において、情報の真偽や物事のよしあしを判断する能力、そのための基盤となる、教養に裏打ちされた知性・道徳・価値観を持つことは、人生をよく生きるうえで非常に重要と思われるからである。複数の史料や研究文献を参照し

て、批判的に歴史像を再構成することや、その過程で過去の人々の思考・判断・行為に触れることは、こうした批判精神や価値判断能力を鍛えることにつながると考える。

### 3. 教育の方法

上記1と2で述べた目標と関連して、授業では以下のようなことを行った。ここでは3つの授業を例として挙げる。

「西洋史の扉」では、西洋史における重要なテーマをいくつか選んで取り上げ、1つのテーマを3～5回で講義し、西洋史に興味を持ってもらうことを目指した。特に、食卓革命を扱ったパートでは、グローバルな視点からヨーロッパと世界のつながりを見ることに力を入れた。「西洋史講義」では、古代から近世までのヨーロッパ史を概説しながら、特定のトピックを挟み込んで深掘りしている。例えば、古代の民主政、中世の紛争解決、近世の身分感覚を取り上げ、現代とは異なる、当時の人々の考え方や意識のあり方に注意を促した。「西洋史研究の歩み」では、歴史の見方・解釈の仕方や世界（史）認識の変遷をたどり、また、今日の歴史学の基礎がどのようにして形成されたかを大まかに示している。今年度は特に、歴史解釈・世界認識の枠組み（理論）が、実際にわれわれが持っている歴史や世界の見方にどのような影響を与えているかを知ってもらおうと試みた。

なお、以上の授業では、授業内容の理解の向上を図るため、el-Campus で復習課題を出し、回答してもらっている。その際、受講生が授業内容をふりかえって要点を整理し、課題の要求にそって自分の言葉で再構成することを重視している。これを繰り返すことが、能動的に考え、批判的に情報を摂取し、情報を分析・総合する能力を身に着けるための基礎になると考えるからである。また、まとまった文章を繰り返し書くことを通じて、書き言葉や論理的な文章に慣れてもらうことも意図している。このため、提出された回答例（2～3例）の紹介・添削・コメントと、回答のポイントの解説を掲載した資料を el-Campus を通じて配布し、それをもとに、次の回の授業の初めに解説を行っている。今年度はこのフィードバックに特に力を入れた。

受講生には、まずは、色々な事に関心を持つ、物事を色々な視点から眺める、多様な価値に触れる、情報を主体的・批判的に摂取する（参照した情報をうのみにしない）といった姿勢を身に着けてもらいたいと考えている。

### 4. 教育の成果

西洋史に関心を持ってもらうという点については、「西洋史の扉」の授業アンケート（自由記述）を見る限り、ある程度、達成されている。「西洋史講義」については、授業期間内に el-Campus を通じて実施した中間アンケートの回答は概ね好意的であり、高校の世界史よりも詳細な内容の西洋史の概説を伝えるという目的は果たせていると思われる。「西洋史研究の歩み」についても、同様のアンケートを実施したが、難度が高めの内容であるにもかかわらず、授業の趣旨はある程度理解されている。今年度は、授業の冒頭に歴史家たちの「名言」を紹介するなどの工夫も試みたが、これについても、学習意欲がわくなどの好意的な反応があった。また、担当授業全般に関して、昨年度からの改善点として、今年度は図版などの視覚資料を積極的に利用したが、これについても肯定的な反応が見られた（他方で、図版資料データの配布を求める声もあった）。復習課題に関しては、他の受講生の回答を知ることができ、参考になる、要点解説が自身の提出した回答を見直すのに役立つといった回答が見られた。

### 5. 改善への努力と今後の目標

受講生全体の、西洋史に対する関心を高める上で、授業の導入の工夫を継続して試みたい。また、復習課題が難しいとの声が少ないからであったため、改善を図りたい。担当授業全体を通じて、1年次から課題への積極的な取り組みを促し、フィードバックを繰り返して、時間をかけてステップアップできるしきみを構築したい。課題の達成度の進歩が実感できれば、学習意欲も向上すると思われる。

### 【添付資料】

2024 年度春学期、「西洋史の扉」、「西洋史講義」授業アンケート、「西洋史講義」中間アンケート（el-Campus を通じて教員が自主的に実施）、2024 年度秋学期、「西洋史研究の歩み」中間アンケート（el-Campus を通じて教員が自主的に実施）